
W.B

そらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W・B

【Nコード】

N5673B

【作者名】

そらら

【あらすじ】

殺すことが彼らの仕事。それでも必死に笑って、必死に食べて、必死に生きてる。そんな人間らしいお話です。初めて書きました！なので、小説と呼べるほど上手じゃないですが…頑張って書くので最後まで読んでいただけたら嬉しいです♪

1. white & black (前書き)

少しグロテスクな表現が含まれています。苦手な方は注意してください。あらすじにはあんなこと書きましたけど、そんな真面目な話でもないです(笑) 軽い気持ちで読んでください♪

1 white&black

すでに夜は深く、それでもなお人は一向に減る予知を見せない。普通ならば暗闇に包まれているであろうこの時間も人工的に作り出された眩しいほどの光がその常識を狂わせ、ざわめく人々を照らしだしている。

この街は狭い。

派手な衣装で着飾り、見るからに裕福そうな中年と歩いていく女性もいれば、その足元でダンボールの家を並べる者もいる。

青年は駅のホームの端で一人、長椅子にもたれて寝息をたてていた。見た目は十代後半。綺麗な身なりをしているため、ホームレスではないだろう。はたからみれば、家出でもして来て行く場が見当たらずただふらふらと迷いこんできた、そんなふうを想像させる。

普段ならこのような所で寝言を呟くことはまずないが、今日は特別だった。

ふと、今までうつ向いていた頭をあげて、青年は眠そうな目を細く開いた。

「……………」

まだ寝ぼけているのか目の前を通り過ぎる人々の波をぼーっと見つめて、大きなあくびをしながら思いつきり背筋を伸ばした。

「…あ。」

その声と共に突然動作が止まる。

彼の脳裏にある人物が浮かんだ。冷や汗がこわばった顔をつたい、それがいつきに彼の頭を覚醒させていくのが分かる。

「やっべえっ！！！！！！」

周囲が注目するほどの大声を出して、青年は走り出した。

電車に乗ろうとする人々とは反対方向に、しかも全速力で走るその姿は異様だったが、その時の彼にそんなことを気遣う余裕などある

はずはなかった。

今思い返せば心からそう思う。

今日のような出来事はもうあって欲しくないと願う。

暗い路地裏に人影が見える。

先ほどの風景とは一転してまるで別世界であるかのようにそこは闇に包まれていた。

男はその闇に溶けこむような黒の服を身に纏い、その姿は遠くから見れば気付かないほどだった。

人が血に染まっている。

その光景は彼にとってさほど違和感のあるものではなかった。

彼の右手には拳銃が握られており、それは彼がこの血だまりを作った張本人であることを示していた。

慣れた手つきで銃をしまい、男はゆっくり口を開いた。

「遅いぞ。」

いつの間にいたのだろう。彼の背後に一人の青年が立っていた。

よく見れば、それは先ほどホームでうたた寝をしていきなり飛び出して行ったあの青年だった。

「悪いっ！…ちよつと、な？」

「ちよつと？」

「い、いろいろあつて！」

「ふうん。」

頭を下げ手を合わせて、焦ったようにそう言う青年とは対象的に男は単調な返事を繰り返す。

「早く来てたんだけどさ…駅で待ってたんだぜ、俺！」

「あつそ。で？」

「だってコウがゼーんぜん来ないから！つい…。」

「ついそのまま寝て、コイツの音で思い出して、やべえっ！とか言いながらお前にしては精一杯な速度でここまで来たってことか？なあ、クード？」

先ほど銃をしまった場所を指さして、コウは嫌味たっぷりの口調をクードに向ける。

クードはうつ向いたまま言い返すことが出来ず、声にならない声を押し込めた。

「……。」

「…まあ、今日は許してやる。」

突然予想外な言葉を聞いて、クードはバツと顔を上げた。

「今日の報酬全部、俺が貰うけどな。」

何を恨むべきか、そんなことは今更もうどうでも良くなった。

ただ、もう一度言おう。

今日のような出来事はもうあつて欲しくないと願う。

1. white & amp; black (後書き)

分かりにくくてすみません (汗: 日々精進します
←
←

2 Don't mind (1) (前書き)

これ読むと雰囲気変わりますwww

2 Don't mind (1)

夢を見た気がする。

緑色を背景に茶色い髪が風に流れて、自分はただそれを見た。近づこうとしても出来なくて、彼の思いとは反対にその姿はあっという間に消えていった。

そんな夢。

ガタンッ

いきなり視界に光が入って、目の前には突然、堅い木の木目がドアツプに現れる。

「痛つてえ…。」

自分が落ちたことは分かった。

体の下敷きになった腕は痺れるように痛いし、きつと寝ていてベッドからでも落ちたのだろう。

だとすれば、この腕と背中への痛みには納得が…背中？

クードは現状を把握しようと首だけを上げて、周りを見回した。しかし、それはすぐに必要ないものとなった。

「さっさと起きろ。」

背後から聞こえた声に

（やっぱりそうか。）

と、クードは内心呆れたように心の中で呟いた。痛む腕を押さえながら上体を起こして、声の発生源へ皮肉たつぷりな言葉を投げる。

「ずいぶんとダイナミックな起こし方ですねえ。」「お前がいつまでも起きないからだ。」

怒りに震わせて放った言葉に返ってきた悪気の無い返事。

言っても無駄だということは分かってはいるが、それでも無駄を繰り返すというのが人間らしい。

途端、今までの鬱憤が爆発したかのように、クードはコウへ食いかかった。

「だからって蹴ることないだろ!？」

「お前が寝坊するのが悪い。」

「寝坊したら蹴って良いって定義がどこにあるんだよ!？」

「無いと思う。」「じゃあ、なんで…!？」

「暗黙の了解だろ?」

こいつには言っても無駄だ。

(本当に無駄だ。)

クードは脱力して、乱れた髪をかきあげながら立ち上がった。

「先に下行ってるぞ。」

脳天気と言って去っていくコウに何も答えず、クードは衣服を着替え始める。

鏡に自分の姿が映っている。金色の髪にはつきりとした目鼻立ち、青い右目に黒い左目。見慣れているとはいえ、昔の自分を思いかえせば少しだけだが違和感を感じる。

あんな夢を見たせいだろうか。

クードは思考を遮るように少しだけ目を瞑った後、上着を手にとって自分の部屋をあとにした。

階段を降りると食卓にはコウと一人の少女が待ちくたびれたような表情で座っていた。

その少女は一見するとクードの妹かと思われるほど幼い容姿をしている。

コウが隣にいるため余計にそう感じるのかもしれないが、華奢な体つきに低い背、長く少しオレンジがかった髪はくせ毛で他人にはとても可愛らしい印象を与えることだろう。

「おはよう。」

少女にそう言われて、クードもぎこちなく挨拶を返した。

「…おはよう、クエラ。」

クエラと呼ばれた少女はニツコリと笑ってクードを見据える。

他人から見れば本当に可愛く、邪気の全く感じられない笑顔だ。

しかし、それはあくまで『他人から見れば』だ。クードやコウから見ればそれは違う。一度関わったことがあれば分かるだろう。

笑っている顔ではあるが、それは決して笑顔ではない。

その笑顔は彼女の食に対する欲望と、それを妨げた者に対する怒りで満ち溢れていた。まるで蛇に睨まれた蛙。

クエラが蛇でクードは蛙。

クードは蛇、いやクエラの呪縛をなんとか振り払って自分の席にいた。

「いただきます。」

一斉に言って、食べ始める。

今時このように礼儀正しい家があるだろうか。本人達の性格は全くと言って良いほど礼儀のその二文字とはかけ離れているというのに。クードは静まりかえった嫌な空気に短いため息を漏らした。

「そっだ！」

突然響いたクエラの声に二人は手を止め、彼女へ視線を向ける。

「どうした？」

コウが少し驚いたように尋ねると、クエラは今まで正面を向いてい

たその顔をコウのほうへと向け直した。

「昨日言つの忘れてたんだけど、今日の任務もう入ってるわよ。」

「え〜。」

先ほどまでの恐怖感などなかったかのようにめんどくさそうな声を出すクード。

コウはそんな彼を横目にもう一度短く尋ねる。

「時間は？」

クエラはその質問に答えず、代わりにポケットから一枚の紙切れを取り出してコウに渡した。

「そこに書いてある通りよ。」

紙にはクエラの字で任務の時間、場所、標的となる物の特徴が簡潔にメモされていた。

コウはひととおり目を通すとそれをそのままクードに手渡す。

「…げっ！？9時！？あと30分しかねえじゃん！！」

クードはそう言くと、焦った様子で紙と時計を交互に見やった。

「ごちそうさま。」

コウは食器の上に持っていたフォークを置いて立ち上がり、椅子にかかっていた上着をとって出ていこうとする。

それを見たクードは急いで残りの食事を口に放り込み、

「ごちそうさま！」

そう言ってコウの後を追っていった。

2 Don't mind (2) + オマケ

外に出ると、空は快晴で暖かい風が心地よく吹いていた。
昨日のような都会的な雰囲気はなく、この街はとても落ち着いている。

人も少なく、緑が多いこの街をクードはたいそう気に入っていた。
コウも口には出さないもののそれなりに好いていることは確かだった。でなければ、この自己中心的な性格からして引っ越しをするなどと言いかねないだろう。

「こんな早い時間に仕事なんて珍しいよな。」

ふと、クードは隣を歩くコウに向かって口を開いた。

普通、朝から任務ということは少ないのだが今日の仕事場は周りに人が少ないため、早い時間でも差し支えないのだろう。

クード達は『リグネーション』という組織に所属している。

リグネーション通称『リグ』は主に暗殺を生業とする、いわば殺し屋だ。クードもコウもクエラもその組織の一員である。

もともとは本部から派遣され、三人それぞれ別々に違う仕事を行っていたのだが、運命というか災難というかたまたまその三人が一緒に仕事をする事が多く、そのまま成り行きで三人仲良くこの街に住み着いてしまい、そして今に至る。

とはいっても、勝手にここにしているわけではない。

なんでも、本部の偉い人（偉い人の名前や顔は明かされていない）が三人の相性を見て一緒に仕事を行えば効率が良くなると考え、クード達三人を共に住ませたらしい。

今となればそれはごく普通のことと、他のリグのメンバーもそれぞれグループを組んで任務をこなしているが、クード達が入りたての頃はまだ個々に仕事をするのが当たり前だった。

そのため、グループを組んで仕事をするというのはクード達が初め

てに近く、それを機に今の任務体型の基盤が生まれたと言っても過言ではないだろう。

これは後から聞いたことだが、一緒に仕事する回数が多かったのもその偉い人が命じていたことが原因らしい。

なぜその偉い人がクード達と一緒にしようと考えたかは未だ謎だが、クードにとっては良い迷惑で、相性が合っていると聞いたその人のセンスを疑わずにはいられなかった。

「今日って何？」

コウから突然の質問受けて、クードは少し驚いたように聞き返す。

「何って？」

「あ？任務だよ、任務。ターゲット。」

「あ、ああ。…知らない。」

「ああ、そう…って、は！？」

「まあまあ。」

「いや、まあまあじゃないだろ！」

「まあまあまあ。」

「クード…。」

「はいはい。」

「…もういい。」

こういった適当な所に真面目なコウはいつも腹をたてる。まあ、それも普段クードがコウによって感じているストレスと比べてみればちょうど釣り合っているのかもしれないが。

そんなこんな言い合ってるうちに二人は目的地へ到着した。

歩いて着く場所、つまりこの街にある悪を掃除するのだと思えば悪い気もしない。

前には吸い込まれそうなほど暗いトンネルがぽっかりと口を開けている。

長々と続くそれを見つめながら、コウは静かに呟いた。

「ここだな。」

さつきとは違い、二人の間に緊迫した空気が流れる。

仕事の空気。

二人はそれぞれ準備を始めた。コウは昨日と同じように胸ポケットから拳銃を取り出し、クードは腰に刺さっている剣を二本抜いて両手に構える。

時間が、流れていく。

「俺ってちよつとカツコ良くね？」

「馬鹿。」

緊迫感が一気に薄らぐ。脳天気なクードに呆れているコウ。

それはいつもの光景で、それでも彼らの目は真っ直ぐに目の前の闇を捉えていた。

すると、クードが僅かに反応した。

「…人間じゃないな。」

そう呟いて、そのトンネルに一步近づく。

それに合わせてコウもゆっくりと近づいていく。

二人がトンネルのすぐ手前まで来た時、

「来るぞ。」

クードの声と共に突然猿のような生き物が一匹、二人の前に姿を現した。といってもその体は猿にしては大きく二人の身長のはばに超している高さだ。

「下品な顔しやがって。」

クードが言うように、その猿の顔はあの猿特有の可愛らしいさなどみじんもなく、ただ狂気に満ち溢れた鋭い目と、よだれを垂らした牙付きの口の化物だった。

化物はクード達をその視界に入れると、ためらう間も見せずに突進してくる。

「行くぞ。」

コウの声を合図に、二人はそれぞれ左右に別れてその標的へと向かって行った。

「はい、終了！」

二人の前には先ほどの化物の死骸が見るも無惨に残されている。

クードは持っていた剣をもとに収め、そう言っていると、満足気に笑みを浮かべた。

その脇でコウは倒した死骸の血液をなにやら小さな白い機械に塗りつけている。

これは、任務の成功を確かめるための確認作業でその標的が人間であろうと今日のような化物であろうと必ず行うことだ。

倒した死骸の血液をその機械に塗り、リグへ送信する。

この機械はリグのグループにひとつずつ配布されており、任務の時に必ず携帯する決まりになっている。

送信し、本部が確認して報酬を得る。

「送った？」

上機嫌そうな口ぶりでクードが尋ねる。

「ああ。」

「お！？いくらいくら！？」

クードは返事を聞いてすぐ飛び付くように近寄って、コウの持った

いる機械の画面へと顔を近付ける。

コウは怪訝な表情をするが、

「まだだ。」

と言つてその機械を離そうとはしない。

顔には出さないが、コウもこの瞬間が楽しみなのだ。

ピ。ピ。ピ。

受信音が鳴つて、二人の顔が一気に期待の色に染まった。

画面に報酬額が表示され、クードは声に出してその数字を数え始めた。

「1、10、100 … え？」

数えていたクードの指と二人の表情が凍り付く。

「……え？」

信じられず、もう一度数えてみるがやっぱり同じだ。

「ち、ちよつと待て。」

今度はコウが数えてみる。だが、結果は変わらず。

「もう一回見せろ！」

「ちよつと貸せ。」

二人ははたから見れば呆れるほど、何度も何度も懲りずにその数を数え直した。

しかし、一度表示された数字が変わるわけもない。

そのうち二人の表情はだんだんと陰りを増して、見るからに脱力して二人同時にその場へしゃがみ込んだ。

「はあゝ？」

「これだけか…。」

「少なえ〜。」

「全くだ…。」

それぞれうつ向いて、愚痴をこぼす。

いつものことだが、任務の報酬は意外に少ない。その理由のひとつにリグはただの殺し屋ではないということがあげられる。

というのは、リグは無差別に人を殺さない。

これは、リグに殺されるもの、つまり標的は、ある共通するものに関わっているものであることを示している。

それは、生物実験。

今の時代、この世界では表向きでは良しとされる生物実験が多発している。

医学の向上、発展、これからの未来のためと称して自分の財産のために生きた命を犠牲にする。

そのようなことが世界中で多数起きているのだ。

リグはつまりそのような科学者、そして先ほどの化物のようにその実験から作り出されたものなど、不法な生物実験に関わるものを抹殺するための組織である。

といっても、リグは表社会で公認されている組織ではない。あくまでも殺しは殺し。殺人をすれば裁かれる。そのため、リグや他の殺し屋もそれぞれ極秘に任務を行っているのである。

ふと、思い出したようにクードが顔を上げた。

「…なあ。」

「…ああ？」

その声にコウはすごくローテンションな声で低く答える。

「腹、減った。」

言うが早いか二人の腹の虫が同時に悲鳴をあげた。

コウは無言のまま、手に持っていた機械をしまつて立ち上がり、歩きだした。

クードもそんなコウを見て、そのあとに続く。

二人は目の前の死骸に一礼した。

これはクード達がグループになってからの決まりで、それはその命に対するせめてもの謝罪、そして、

「ありがとう。」

クードは頭を下げたまま静かに呟いた。

「帰るぞ。」

コウはまるで何事も無かったかのようにクードへ呼びかけてそのまま歩き出した。

クードも何も言わずにその後へ続く。

「怖いな。」

帰路を歩きながら、なんの前ぶれもなくコウが言った。

「は？」

当然の反応だろう。クードは間の抜けた返事をしてコウの顔を見た。すると、コウは真剣な顔で朝クエラに渡されたメモを太陽に透かし、

眩しそうに目を細めている。

「何やってんの？」

クードはそんなコウに怪訝に質問した。

コウは何も言わず、困った顔でそのメモをクードに手渡すと

「右下。」

と言つて、短いため息をついた。

クードが言われた通り、そのメモの右下のほうへと視線を移すとなにやら任務のメモとは違う色ペンではっきりと文字が示してある。

『太陽にかざしてみてね』

とてつもなく嫌な予感がする。

そう思い、クードがコウの顔を見るとコウはもう一度ため息をついた。

自分もため息をつきたくなつたが、クードはさっきコウがやっていたようにそのメモを自分の顔より少し上に持ってきて、太陽にかざしてみた。

「ん？」

なにやら文字が浮き出ている。

クードは更にそのメモに目を近付けて、そこで動きが止まった。

『砂糖 200g

塩 100g

卵 10個

(新鮮なやつ)

人参 2本

ドッグフード1袋

よろしくね』

「なんで気付いちゃったんだよ。」

こうなるだろうと思っただけでも、やつあたりくらいしたくなる。

「知るか。」

コウも同じらしい。

「どうすんだよ？もうすぐそこまで来たんだぞ？」

「知るか。」

「また戻るのか？」

「知るか。」

「30分？」

「…でも、行かなきゃどうなるか分かんねえぞ？」

確かにそうだ。

クードは

「んー。」

と唸りながら考えて、やがて、

「そうだ！」

と顔を上げた。

「ジャンケンだ！」

すると、コウは得意気に笑って袖をまくる。

「良いだろう。」

二人の掛け声が同時に響いた。

こうなることは分かっていた。

今思えば、ジャンケンが弱いことくらい知っていた。

ことごとくついてない自分に自己嫌悪を抱きながらも、クードはメモを片手に道を歩く。歩きながら、一言。

「…腹、減ったなあ。」

そう呟く。

その声は少し落ちぎみの太陽に照らされて、虚しく響いていた。

帰った後、クエラに

「遅い！」

と怒鳴られることを今の彼が知るはずもない。

2 Don't mind (2) + オマケ (後書き)

第二部終わりました！ここまで読んでいただき、ありがとうございました！

3 train+train(1)

景色が変わっていく。

様々な自然や家や人をあつという間に通り過ぎて、今、この列車は進んでいく。

窓を開けて、爽やかな風を頬に受けながら、クード達は列車の座席に腰を下ろしていた。

「あと何駅？」

ふと、あくび混じりにクードが尋ねる。

「次、ヨネツクだから…あと5駅。」

コウは指折り数えて、淡々と眠た目なクードに話す。

「眠いなら寝れば良いだろ？」

「起こしてくれる？」

「蹴るぞ。」

二人はこれから本部に向かおうとしている。本部はクード達が在住する街からかなりの距離はなれているため、向かうとなれば、前々から計画を立てていなければならない。

それがなぜ、こんなにも急に本部へ向かっているのかというと、その理由は今から約三時間前にさかのぼる。

三人がいつもの席で朝食をとっている。

「今日って何日？」

ふと、思い出したようにコウが尋ねるとクエラがその問いに答えた。

「2月20日だけど？」

「そうか。」

コウはうなずくと、そのまま食事を続けた。クードは不思議に思っ
て「なんかあんの？」

とコウに聞く。

すると、コウは椅子にかけていた上着のポケットからカードのようなものを取り出して、クードに見せた。

「免許の書き換え。今月までだから、そろそろ行かなきゃいけない
と思うて。」

と、コウは説明する。クードの顔が一瞬固まる。

「どうかした？」

その表情に気付いてクエラがそう尋ねるとクードは

「大丈夫。」

と、ぎこちなく笑いコウに免許書を返した。

コウはそんなクードの異変に気付いたのか、鋭い目をしてクードに
右手を突き出して言った。

「おい、免許書見せる。」

クードはあからさまに焦りの色を浮かべて、

「なんで？」

と、とぼける。

「いいから、見せる。」

コウはクードが押さえていた右ポケットに無理矢理自分の手を突っ
込んで、手早くクードの免許書を取り出す。

「…やつぱり。」

予感的中。

クードは気まずそうな表情で横目にコウを見つめる。

クエラはそんな二人を見て何か感づいたように、ふふん、と鼻で笑
い、コウの手の中にある免許書に目を通した。

「有効期限、1月12日。とくに過ぎちゃってるよ？クードく
ん？」

クエラは面白そうに笑みを浮かべて、わざとらしくクードに言った。
クードは内心腹を立てながらも、言い返すことが出来ずうつ向く。

「おい、本部行くぞ。」

「は？」

いきなりの提案に少々驚きつつ、しかし、予想をしないでもなかったそれに、クードはめんどくさ気に顔を上げる。

見ると、コウはすでに上着を着て、ドアへと歩き出していた。

「今かよっ!」

クードはその後ろ姿にそう叫ぶと、上着を持って急いで後を追いかけていった。

「お前が悪い。」

「はい。」

「お前が忘れていたのが悪い。」

「はい。」

「免許書ないとリグに居られなくなるんだぞ?」

「分かってます。」

コウに何度も責められて、クードはだんだん嫌気がさしてきた。

コウの性格と、自分の失態に。

免許書はリグの者、全員に配布される。

常識としてはおかしい話だが、リグにとって免許書は殺すための免許を示すものであり、リグのメンバーであるという証だ。

報酬を貰う際にも、血液を採取し、この免許書をスキャンさせて、報酬を得る。

グループでいる場合、そのうちの誰か一人が免許書を持っていれば済む話ではあるが、免許書の期限が切れて3ヶ月間経つと、自動的にリグのメンバーから除外されることになっている。そして、除外された者、つまりリグを辞めた者は正式な手続きをし、組織が運営する施設、または組織内にある多くのメンバーの目が届く場所で残りの人生を生きなくてはならない。

これは、リグの存在を他者に悟られぬための重要な決まり事だが、もしその規則を破り、勝手にリグを辞めるなどという人物があればそれらは一人残らず抹殺される。

これは、リグの掟だ。

コウは先ほどから、座席の背もたれに入っていた新聞を広げ、それに黙って目を通している。

クードは何か特別することも無く、新聞を読んでいるコウに話しかければそれなりのむくいを受けるだろうということも知っていたので、ただぼーっと流れる景色を見つめていた。

前髪が風に揺れる。

ふと、視線を移すと斜め前の席に座っている少女がこっちを見ていた。

その少女はクエラよりも少し小さいようだが、大きな目やあどけなさの残る顔つきとは対症的に、黒く流れるような髪を持つ、なんだから大人びた雰囲気を感じた少女だった。

クードが彼女に視線をあてていても、彼女の視線と重なることはない。

一瞬クードは不思議に思ったが、すぐに（なるほど。）

と、心中そう呟いて、コウの顔を見た。

未だ無心になって新聞を読み続けているこの男は鈍感で感づくことはまずないだろうが、女性から見てコイツの顔は結構なイケメンの部類に入る。

悔しいが、クードにその素質はないため、一緒にいれば度々このような女性に出くわすことが結構あるのだ。

「なんだ？ 気持ち悪いな。」

その声に思考が途切れ前を見ると、張本人がクードに怪訝な目を向けていた。

黒い髪に黒い瞳、それはここらでは珍しいし顔立ちも整っていて背も高い。「確かに、イケメンかもしれないな。」

「はあ？」

思わずクードはそう声に出して、それにコウは呆気にとられ間の抜

けた声を出した。

「あ、いや、なんでもない。」

そんなコウの声に我に返り、クードは少しどもりながら言った。

「なんだ、お前。ついにイツちゃったか？まさか薬^{やく}じゃないだろうな？ん？」

その言葉に一瞬、クードの頭に青筋が浮かぶ。

（イケメンのくせにムカつく。）

実際、イケメンだから良いヤツとは限らないのだが、今のクードにそんなことには考えている余裕はない。むしろ、イケメンで良いヤツのほうで腹が立つものだと思うのだが。

クードは奇々した様子で反論し始めた。

「お前な…調子に乗るなよ。いくらお前がイケメンだからって俺は穏和で優しい好青年だからな！お前なんかよりモテるんだ！」

「はあ？お前さっきから何言ってた？ホント、大丈夫？」

そう言つて、コウはクードの目の前で手をひらひらさせた。

クードの怒り度がだんだんアップしていく。

ひらひらひらひら

そのひらひらの数ごとにクードの怒り度のメーターは着実にあがっていった。

そして…

「いい加減にしろ！お前、絶対バカにして…」

ドーンッ！……！……！

確かに爆発だが、怒りではない。
本当に聞こえたのだ。

車内が静寂に包まれる。

立ち上がったクードも固まったままで、コウも新聞を片手に持ったまま動かないでいる。きつと今、この静寂の中、車内にいる全員が同じことを考えているだろう。

『今の音はなんだ？』

「なんだ…今の？」

すると、クード達より後方の席に座っていた若い男がその疑問を声に直した。

と、同時に列車は音もなく動きを止め、そして間もなく車内がざわめき始めた。

「コウ。」

ふと、クードがコウの名前を呼ぶ。

「おい…。」

何か感づいた様子で答えるコウにクードは素直にうなずいた。

「聞こえる。間違いない。」

そう言つて、クードは走りだした。

コウも後を追う。

前方にあった別車両へと続くドアに手をかけると同時に耳を突き刺すような悲鳴が車内に響いた。

すると突然、クード達の目の前のドアと後方の後ろの車両へと続くドアが勢いよく開き、大勢の乗客が顔に恐怖の色を浮かべて駆け込んで来た。

二人はその人々の波で前に進めず、もとの車両の中程へと押し戻さ

れてしまった。

車内は一気に混雑する。

もともと一車両に十数人と乗客数は少なかったが、全ての車両から一つの車両へ集まるとなると話は別だ。

ざわめく人々は口々に

「殺される」

「怖い」

「化物」

などと言う単語を呟いて、顔を青ざめさせている。

（やっぱり。）

コウは心中で舌打ちをした。

車内が混雑しているせいでクードの姿は見えず、たとえ見つけたとしても近付くことは出来ないだろう。

コウは悔しそうに顔を歪ませて、辺りを見回す。すると、すぐ近くの座席にある窓が開いているのに気付いた。

コウはなにやら少し考えた後、人々をかき分けてその窓に近付き、窓の外へと身を乗り出した。

上で何かがうごめいているのが分かる。

コウはそこから窓枠に手をかけ、車両の上へと体を滑らせた。

「コウー！おーい！」クードはありったけの声で叫んでいた。

しかし、コウに聞こえるはずもない。

コウの耳がクードのものより特殊であるなら話しは別だが、ましてやこの混乱の中、普通の人間に聞こえるはずもないのだ。

リグのメンバーはほとんど皆、特殊な能力を持っている。それは生まれつき人より多少なりとも優れている部分を更に強化するもので、目であったり、頭脳であったりその部分や能力は人によって異なる。

クードにとってそれは耳にあたる。つまりクードの耳は特殊なのだ。遠くの音もある程度までなら識別でき、また、超音波のように普通の人間には聞くことの出来ない音もクードには聞こえる。そんな特殊な耳でさえ上手く聞こえないのである。

クードは先ほどから困った顔でひたすらに耳を澄ましていた。上手く判別することができない。

コウの声を探そうにも乗客のざわめきが邪魔してかき消されてしまいうし、乗客が大勢押し寄せてきて動きたくても動けない。

「すいません。ちょっと良いですか？」

クードは仕方なく前方にいる一人一人に声をかけながら、かき分けるように前へ進むことにした。

「ごめんなさい。通してください。」

そう言つてクードは前方のドアに近付いていく。避けた人々は進んでいくクードを目で追つて、怪訝そうな、または驚いたような表情をその顔に浮かべる。

「おい、兄ちゃん。やめときな。」

ふと、後ろから声がかかつて、振り返るとそこには白髪の老人が心配そうにクードを見つめていた。

クードは少し驚いた後で

「大丈夫ですよ。」

と、笑いかけ、目の前のドアノブへ手をかけた。

クードがドアを開けるとそこには、何か赤い触手のようなものに掴まれて絶命している人々と、そして先ほどの悲鳴の持ち主だろうか、首がない女性の亡骸がそこにはあった。

クードはそれを見て少し顔をしかめたあと振り返り、後方にいる人々へ呼びかける。

「なるべく中央に寄ってください！絶対、この車両から出ないで！」
先ほど、クードがドアを開けたせいで、ざわついていた車内も静ま

りかえりクードの声に誰もが耳を傾けていた。
クードは人々に

「大丈夫。落ち着いて待っていてください。」
と、付け足してそのドアを閉めた。

いくつもの血がある。クードにとってもそれは見慣れたものであったが、見ていて気持ちの良いものではない。

クードは剣を抜き、両手に構えた。

確かに、生物がいるのが分かる。

クードの耳は優れているため、神経を集中させれば生物の鼓動を聞き取ることなど容易い。

普段は必要がないため聞かないが、必要な時耳を澄ませば大抵どんな小さな音でも聞き取れる、便利な耳だ。

クードは集中しながら、ゆっくりとその音へ近付いていく。

四人分座れる座席の間に何かがいる。

クードは少し間合いをとれるように近付き、その生物を視界に入れた。

「…タコ。」

赤く丸い胴体にそこから生えた赤い触手。
見るからにタコだ。

だが、その触手は細く吸盤も見当たらない。クードは少し考えた後、そのタコへ斬りかかろうと一気に剣を振り上げた。

バーンッ

ドーンッ

突然、大きな音が順に二つ響いた。
クードは固まったまま今起こった出来事にただ口をぽっかり開けている。

擬音語だけでは不十分なので、説明しよう。

バーンッ

コウの銃が火を吹いて

ドーンッ

タコの上に乗ったコウが天井を突き破って降ってきた。しかも、クードの目の前。ということはもちろん、斬ろうとしていたタコもコウとコウが乗っているタコの下敷きになっている。

「コウっ!？」

クードは驚いたようにコウの名前を呼んだ。

すると、コウは無言のままタコの上から降り、クードの脇へ移動してくる。

「気をつける、クード。こいつら意外に手強いぞ。」

突然、緊迫した様子でそう話すコウに少し驚いて、クードがコウのほうを見ると彼の額が若干汗ばんでいる。

更に視線を落とすと、おそらくこのタコにやられたのであろう傷が彼の足を赤く染めていた。

クードは少し心配そうな顔でコウに尋ねる。

「…足、大丈夫か？」

するとコウはこつちを向き、

「人の心配できるヒマあんのか？」

と、バカにしたふうに言った。

クが、その触手は細く吸盤も見当たらない。

クードは少し考えた後、そのタコへ斬りかかろうと一気に剣を振り上げた。

バーンッ

ドーンッ

突然、大きな音が順に二つ響いた。

クードは固まったまま今起こった出来事にただ口をぽっかり開けている。

擬音語だけでは不十分なので、説明しよう。

バーンッ

コウの銃が火を吹いて

ドーンッ

タコの上に乗ったコウが天井を突き破って降ってきた。しかも、クードの目の前。ということはもちろん、斬ろうとしていたタコもコウとコウが乗っているタコの下敷きになっている。

「コウっ!？」

クードは驚いたようにコウの名前を呼んだ。

すると、コウは無言のままタコの上から降り、クードの脇へ移動してくる。

「気をつける、クード。こいつら意外に手強いぞ。」

突然、緊迫した様子でそう話すコウに少し驚いて、クードがコウのほうを見ると彼の額が若干汗ばんでいる。

更に視線を落とすと、おそらくこのタコにやられたのであろう傷が彼の足を赤く染めていた。

クードは少し心配そうな顔でコウに尋ねる。

「…足、大丈夫か？」

するとコウはこっちを向き、

「人の心配できるヒマあんのか？」

と、バカにしたふうと言った。

クードは笑って

「じゃあ、お前も自分の心配してる!」

と言い、タコに斬りかかっていった。

車内は無言だった。

時折響く轟音に乗客たちは不安感を募らせていた。

ある者は現状を把握しようと窓の外を覗き込み、またある者は恐怖に膝を抱えている。

誰一人として話そうとはしない。

そこに、一人の少女がいた。先ほど、クードの斜め前の席に座っていた少女だ。

彼女もまた、他の乗客と同じように長椅子の隅で肩を震わせていた。ふと、先ほどクードに声をかけていたあの老人が彼女の隣に腰を下ろした。

少女は少し驚いて老人の顔を見つめたが、そんな彼女に老人はにっこり微笑み、口を開いた。

「大丈夫。」

すると突然、後方のドアが音をたてて開いた。

化物の侵入を防ごうとドアの前に立っていた乗務員がその衝撃で中のほうへと追いやられる。

人々の顔が恐怖にひきつる。

しかし、そこから出てきたのは化物ではなくコウだった。

駆け込んで来たコウは

「どいて!」

と言いながらその車両を走り抜け、前方のドアに近付いていく。

コウが走っている間、天井からはおそらく化物のものであるう足音がコウと並行して進んでいく。

コウは前方のドアノブに手をかけて、

「下がって！」

と、そう叫び、ドアの向こう側には天井から降りてきた化物が姿を現した。

瞬間、コウの持っていた銃が火を吹いた。

化物は後方に後ずさり、苦しそうにその触手を悶えさせる。

少しの間、静寂が場を包む。

「コウ！向こうの一匹終わったぞ！」

クードはその声と同時に、開いていた窓から中へ入りコウの隣へとやってきた。

コウはそれを聞いて少し安心したように

「そうか。じゃあ、あとはコイツだけだな。」

と目の前で悶えている一匹のタコに目を向ける。クードはうなずく。

「ああ。まったく、手間かけさせやがって。」

「後で、報酬たんまり貰ってやる。」

「捌いてやる。」

「タコ焼きな。」

二人は笑って、目の前の標的を見据えた。

乗客はただ驚いた様子で二人を見ていた。

少女もまた、同じだ。

そんなことはお構いなしに、二人は走り出した。クードが飛躍して

その化物の触手を切り裂き、コウの銃弾がその胴体を突き抜ける。

化物は残っている触手を伸ばし反撃しようとするが、クードは片方の剣で攻撃を受け止め、もう片方の剣でその触手を切り落とした。

化物の悲鳴が辺りに響く。

最後にコウの銃弾をその体に受け、化物はやがて命を絶った。

二人は武器をしまって、動かなくなった化物を見つめる。

化物は白い体液をその傷口から流し、体の色を変色させている。ク

ードはそれを見て、少しだけ顔をしかめた。

「ぐ……っ。」

ふいに、コウが小さくうめいた。

見ると、床に膝を突き傷を負った部分を手でかばっている。

クードは驚いて、コウに駆け寄った。

「大丈夫か!？」

そう呼びかけると、コウは苦しそうな顔でクードを見る。

「馬鹿だろ、お前。」

口ではそう言いつつもやはり心配なのか、クードは少し焦ったように周りの乗客を見回す。

「誰か、治療出来る人いますか？」

しかし先ほどの衝撃のせいか、誰しもが無言でただクードを見るだけだった。

クードは少し困ったようにコウの顔を見る。

見るからに辛そうな表情に、額に汗を浮かばせ息をきらしている。きつと、化物の毒素が傷口から入り炎症を起こしているのだろう。先ほどから無理をしているのは知っていたが、コウの性格やリグとしての誇りを考え、クードはあえて何も言わなかったのだ。

ふと、乗客のうちの一人が控えめに手をあげた。見ると、それは先ほどの少女だ。

「私、村の病院で働きます。」

彼女は小さくそう言うつと、コウの傍へ近寄った。

クードはそれを見て、少し安堵したように小さくため息をついた。

3 train+train(1)(後書き)

説明文が多いですが、これから少なくなると思うので(たぶん)もうちょっと我慢していてください(笑) もっと読みやすくなるように努力したいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5673b/>

W.B

2010年12月14日20時02分発行